

**研究拠点形成事業**  
**平成 28 年度 実施報告書**  
**(平成 25～27 年度採択課題用)**

A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	東京大学東洋文化研究所
アメリカ拠点機関：	プリンストン大学
フランス拠点機関：	社会科学高等研究院
ドイツ拠点機関：	ベルリン・フンボルト大学

2. 研究交流課題名

(和文)： 新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築  
(交流分野： 歴史学 )

(英文)： Global History Collaborative  
(交流分野： History )

研究交流課題に係るホームページ：[http:// coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/](http://coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/)

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日  
(3 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：東京大学東洋文化研究所

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：東洋文化研究所・所長・高見澤磨

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：東洋文化研究所・教授・羽田正

協力機関：

事務組織：東京大学東洋文化研究所事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：アメリカ合衆国

拠点機関：(英文) Princeton University

(和文) プリンストン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Department of History・Professor・  
Jeremy ADELMAN

経費負担区分 (A型) : パターン1

(2) 国名 : フランス共和国

拠点機関 : (英文) Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales

(和文) 社会科学高等研究院

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Research Centre for History・Professor・Alessandro STANZIANI

経費負担区分 (A型) : パターン1

(3) 国名 : ドイツ連邦共和国

拠点機関 : (英文) Berlin Humboldt University

(和文) ベルリン・フンボルト大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Institute of Asian and African Studies・Professor・Andreas ECKERT

協力機関 : (英文) Berlin Free University

(和文) ベルリン・自由大学

経費負担区分 (A型) : パターン1

## 5. 研究交流目標

### 5-1. 全期間を通じた研究交流目標

1. 新しい世界史理解と叙述の探求と確立 : 従来、世界各地における世界史の見方は、ヨーロッパ中心史観を下敷きとするという点では共通点を持ちながらも、国や地域によって多様だった。この多様な世界史の見方を拠点間で相互に参照・批判するとともに、現代世界において必要な地球への帰属意識 (地球市民意識) を共有できる新しい世界史の理解と叙述の方法を、拠点間の議論を通じて探求し確立する。

2. ミクロな歴史研究との交流 : 新しい世界史研究の成果を、一国史や地域史などミクロ・レベルの歴史の研究者に投げかけて当該研究領域における既存の知の再検討を促す。また、その再検討結果を新しい世界史の解釈に活用する。この相互往復運動の繰り返しによって、歴史研究全体の活性化を図る。

3. 上記2つの大目標を達成するために、4研究機関が緊密に連携し、新しい世界史研究と教育のためのネットワーク型拠点を構築する。このネットワークによって実現を図る主な事業は次のとおりである。

①研究者の交流 : 毎年一定数の研究者、PDを他の3拠点機関に派遣し、同時に3拠点機関から研究者を受け入れる。派遣・受け入れ研究者は、派遣先・受け入れ先で講演や授業を行い、国際共同研究に参画する。

②①と連動させる形で、毎年いずれかの拠点機関でテーマを定めた研究集会とセミナーを開催す

る。

③毎夏、いずれかの拠点機関で公開サマースクールを開講し、4拠点機関の大学院学生を中心に広く世界の若手研究者に世界史学習と研究交流の場を提供する。また、博士論文を準備中の大学院生に対して、4拠点機関の研究者からなる指導チームを編成し、より完成度の高い論文が執筆できるように共同で指導する。

## 5-2. 平成28年度研究交流目標

＜研究協力体制の構築＞

初年度、二年度の事業を通じて形成された4拠点間の相互理解と協力関係をさらに深化させ、安定的な研究協力体制を構築する。世界各地で行われているグローバル・ヒストリー研究との連携を図るために、4拠点の研究者が可能な限り協力し、4拠点以外の場所での研究集会開催を企画する。

＜学術的観点＞

各国、各言語によって微妙に異なる新しい世界史/グローバル・ヒストリーの意味や研究方法を確認し、学術面での相互理解を進める。また、4拠点の研究者が執筆したグローバル・ヒストリーに関する論文集を日本語で刊行する。また、グローバル・ヒストリーの方法を用いた研究を推進するために、具体的なテーマに関するワークショップを複数回開催する。

＜若手研究者育成＞

第2回サマースクールをプリンストン大学で開催し、各拠点から参加する複数の研究者が共同で大学院学生を指導する。また、意欲あるPDや大学院学生を1～6か月間、海外の拠点に派遣し、自らの研究成果を報告し、学術交流を進める機会を作る。

＜その他（社会貢献や独自の目的等）＞

日本国内において、新しい世界史/グローバル・ヒストリー的な歴史研究への理解を深め、それを根付かせるための取組を企画し、実行する。上記の論文集刊行はその一環であるが、それ以外にも、協力研究者による講演や研究会を実施する。

## 6. 平成28年度研究交流成果

### 6-1 研究協力体制の構築状況

2015年の東京大学での第1回に続いて、2016年5月にプリンストン大学で4拠点による第2回サマースクールが開催され、東京モデルのサマースクールの運営は確立・定着し、そのプログラムの作り方や参加者の数などは4拠点に共有されるようになった。

4拠点共催のセミナーは、第3回が東京大学で開催され、各拠点の研究者の顔見せと研究紹介の段階から、真の意味での共同研究プログラムの構築へ向けての話し合いが進んだ。

また、サンチャゴ（チリ）でグローバル・ヒストリーの方法に関するワークショップを開催し、2016年12月、2017年1月の東京でのワークショップでは、中国、スウェーデンなど、4拠点以外からも多くの研究者の参加を得た。

## 6-2 学術面の成果

海外拠点の研究者たちとの交流によって得られた知見をも織り込み、東京拠点の責任者である羽田と他の主要な研究者によって、日本語と英語、フランス語でグローバル・ヒストリーと新しい世界史に関連する論文が数多く公表された（後掲、業績一覧参照）。また、外国の拠点にGHC教育研究ネットワークが与えた影響として、例えば、プリンストン拠点の責任者であるエイデルマンは、最近発表したオンライン・ジャーナルの論文（<https://aeon.co/essays/is-global-history-still-possible-or-has-it-had-its-moment>）を執筆するにあたって、共同研究会でのGHCの仲間、特に羽田の発言を思い浮かべたと、羽田への個人的なメールに記している。羽田は、2016年6月にパリで開催された *Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales* の共同研究評価委員会に出席し、ベルリン拠点の責任者であるエッカートとともに、提出された共同研究の申請書の評価を担当したが、これもこのネットワークの有効活用の例だと言えるだろう。このように、GHCのネットワークを通じての双方向での学術交流は、確実に進んでいる。

4拠点の研究者が執筆した論文を集めて出版する『グローバル・ヒストリーの可能性』プロジェクトの作業は順調に進んだ。13人の研究者からの論文がすべて集まり、英語論文の日本語への翻訳が終わり、平成28年度中に原稿を出版社に提出した。平成29年秋には刊行できる予定である。

2017年1月に東京で開催された4拠点共催による研究セミナーの際に、主要な研究者の間で、4拠点による具体的な共同研究の計画についての話し合いが持たれ、「グローバル・ヒストリーの観点からみた国民史形成」というトピックについて、平成29年度のイベントで各拠点の研究者が集まる際（9月ベルリン、1月プリンストン）に、発表と意見交換を積み重ね、英語による論集の出版を目指すこととなった。これも、本年度の共同研究から生まれた大きな成果である。

## 6-3 若手研究者育成

1) 第2回GHCサマースクールをプリンストン大学で開催した（2016/5/9～14）。東京拠点からは学生3名と研究者3名が参加し、海外3拠点からの学生13名、研究者8名とともに、学生たちの博士論文計画について討議した。また、各拠点の研究者が、グローバル・ヒストリーの方法の様々な側面について話題提供を行い、全員で議論を深めた。

2) 2名の大学院学生を、6カ月間プリンストン大学に派遣した。彼らは、プリンストン拠点の責任者であるエイデルマン教授のゼミをはじめ、各自のテーマに関連する授業に出席し、博士論文執筆・完成に向けて研鑽に努めた。

3) 第1回東大-プリンストン・ウインタースクールを、東京大学で開催した（2017/1/26）。両大学から、学生各4名、教員各3名と東大側のオブザーバー数名が出席し、4拠点のサマースクールと同様、個々の学生の博士論文計画について、様々な角度から討議を行った。また、このスクールに参加した学生たちは、翌日から2日間開催された4拠点研究者による「資史料」についてのセミナーにも出席し、知見を広めた。

4) 本拠点に所属するポスドク研究者をベルリン拠点に派遣した。この研究者は、主と

してベルリンで関係研究者たちと交流を行うとともに、ベルリンとハイデルベルクで自らのテーマについて報告を行った。

5) 東京拠点に滞在中の海外からの若手研究者に自らの研究について報告の機会を与えるとともに、日本の若手研究者との交流の場を提供するために、若手研究者セミナーを2回開催し、合計10人の海外若手研究者が報告を行った。

#### 6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

日本国内の日本史研究者との学術交流を図るために、2名の研究者を招き、グローバル・ヒストリーと日本史の接点について、意見交換を行った。

#### 6-5 今後の課題・問題点

海外の研究者たちとの交流によって得られた様々な知見と視点を、国内で、できるだけ早く、より広い範囲の人たちに伝えるための工夫が必要である。一般向けの講演会やウェブを活用したプログラムの開発などの点で、さらに努力したい。

#### 6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- (1) 平成28年度に学術雑誌等に発表した論文・著書      33本  
うち、相手国参加研究者との共著      1本
- (2) 平成28年度の国際会議における発表      21件  
うち、相手国参加研究者との共同発表      0件
- (3) 平成28年度の国内学会・シンポジウム等における発表      16件  
うち、相手国参加研究者との共同発表      0件

### 7. 平成28年度研究交流実績状況

#### 7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成30年度
研究課題名	(和文) 世界史/グローバル・ヒストリーの方法				
	(英文) Methodology of World/Global History				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授				
	(英文) HANEDA Masashi・Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Jeremy ADELMAN・Princeton University・Professor				
	Alessandro STANZIANI・EHESS・Professor				
	Andreas ECKERT・Berlin Humbolt University・Professor				

28度の研究交流活動	<p>1. 東京における講演会とワークショップ開催</p> <p>ワークショップを2回、講演会を2回、若手研究者報告会を2回開催した。詳細は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・WS:「グローバル・ヒストリーの方法」(2016.7.16)、「日本宗教史と世界を繋ぐ」(2016.10.22)</li> <li>・講演会: Romano 教授 (EHESS, 2016.12.16)、Eckert 教授 (Berlin/Humboldt, 2017.2.14)</li> <li>・若手研究者報告会 :2回 (2016.7.11) (2016.11.21)</li> </ul> <p>2. 海外拠点での共同研究会の開催</p> <p>協力研究者を海外3拠点に派遣し、共同研究会を通じての研究交流を進めた。詳細は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・杉浦未樹:プリンストン大学で美術史関係の研究者と交流を行い (2016.4.26-5.16)、平成29年度には、この研究者とともに東京で会議を開催することとなった。</li> <li>・Lee Ju-Ling:ベルリン・フンボルト大学に滞在し (2016.5.5-6.5)、関連研究者と交流を深めるとともに、ベルリンとハイデルベルクで研究発表を行った。</li> <li>・大学院学生の程永超と Mandkhai を、前年のサマースクールを機に企画された大学院学生共同の論文執筆検討会出席のため、フランス社会科学高等研究院に派遣した (2016.5.17-25 (うち5.20-24は不可用務))。共同執筆論文は、ウェブ上で刊行された。</li> </ul> <p>3. サマースクールの開催</p> <p>海外3拠点と協力し、2016年5月9～14日に、プリンストン大学で大学院学生を対象とするサマースクールを開催した。</p> <p>4. 国際ワークショップの開催</p> <p>サンチャゴ(チリ)のチリ・カトリカ大学で、世界史/グローバル・ヒストリーの枠組みに関するワークショップ (“Global History in Chile and Japan”) を開催するとともに、今後の共同研究の計画について、チリの研究者と討議した。</p>
------------	---

<p>28年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 世界史/グローバル・ヒストリー研究における4拠点間での研究交流の深化と実質的な共同研究実施体制の構築</li><li>2. 世界史/グローバル・ヒストリー研究において、日本人研究者の研究の重要性を諸外国の研究者が認識したこと</li><li>3. サマースクールの開催方法とプログラムが、4拠点の責任者の間で共有され、それがさらにプリンストン大と東京大の間でのウィンタースクールの開催につながったこと</li><li>4. 27年度に続いて、多くの有力な海外研究者が東京を訪れて、講演や研究発表を行い、グローバル・ヒストリー研究の重要性を、日本国内にアピールできたこと</li><li>5. 4拠点の責任者の間における信頼関係がさらに強まり、実質的な共同研究をスタートする機運が高まったこと</li></ol>
--------------------------------------	--

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	<p>(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」 GHC 国際ワークショップ "Towards a transcultural history of diplomacy"</p> <p>(英文) JSPS Core-to-Core Program "Global History Collaborative" workshop "Towards a transcultural history of diplomacy"</p>
開催期間	2016年12月9日～11日(3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	<p>(和文) 日本、東京、東京大学東洋文化研究所</p> <p>(英文)</p>
日本側開催責任者 氏名・所属・職	<p>(和文) 羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授</p> <p>(英文) HANEDA Masashi・Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo・Professor</p>
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	21/45
	B.	37
アメリカ 〈人/人日〉	A.	0/0
	B.	0
フランス 〈人/人日〉	A.	2/10
	B.	0
ドイツ 〈人/人日〉	A.	2/10
	B.	0
イギリス (第三国) 〈人/人日〉	A.	2/10
	B.	0
スウェーデン (第三国) 〈人/人日〉	A.	3/15
	B.	0
ノルウェー (第三国) 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	0
フィンランド (第三国) 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	0
スペイン (第三国) 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	0
オランダ (第三国) 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	0
合計 〈人/人日〉	A.	25/65
	B.	37

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>まだ <b>diplomacy</b>、あるいはその訳語である「外交」という概念がなかった 17-18 世紀の世界各地における「外交」について、日本と海外の研究者が共同で様々な角度から検討を加え、「外交」概念の再考とヨーロッパ中心史観的な外交史の再構築を目指す。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 海外から参加した研究者の多くは、ヨーロッパ史の専門家である。彼らに「日本」や東アジアにおける同様の事例を紹介することによって、彼らが思い描く前近代における「外交」という概念やその実像が、必ずしも世界全体を対象としては適用できないということを示しえた。</li> <li>2. セミナーでは、スウェーデンをはじめとする北ヨーロッパの事例が数多く紹介され、日本や東アジアの歴史研究者も飛躍的にその知見を拡大することができた。</li> <li>3. 東京拠点に滞在中の海外若手研究者や日本人若手研究者が発表の機会を得、彼らと海外の研究者との間でのネットワーク構築が進展した。</li> <li>4. 全体として、前近代の「外交」を世界レベルで比較することにより、各国史、地域史、それに世界史の理解を大幅に書き換えることができるという見通しを得ることができた。</li> <li>5. 次回のセミナーをスイスで開催するという目途がついた。</li> </ol>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>コーディネーターの羽田正が運営の責任者となり、ジュニア・メンバーの <b>Lisa Hellman</b> が運営の実務を担当。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>国内旅費</p> <p>謝金</p> <p>その他経費（会議費）</p> <p>消費税</p> <p>合計</p>	<p>金額</p> <p>5 5 9, 6 6 2 円</p> <p>1 4, 9 1 2 円</p> <p>4 2 1, 8 1 7 円</p> <p>1, 1 9 3 円</p> <p>9 9 7, 5 8 4 円</p>
	<p>(フランス・ドイツ) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>	
	<p>その他 (イギリス・スウェーデン・ルウェー・フィンランド・スペイン・オランダ)</p>	<p>内容 外国旅費</p>	

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」 第3回 GHC 共同研究セミナー ”Sources in Global History” (英文) JSPS Core-to-Core Program “Global History Collaborative” GHC Joint Seminar ”Sources in Global History”
開催期間	平成29年1月28日 ～ 平成29年1月29日 (2日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、東京大学東洋文化研究所 (英文) Japan, Tokyo, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 羽田 正・東京大学東洋文化研究所・教授 (英文) HANEDA Masashi・Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo・Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	34 / 72	
	16	
アメリカ 〈人／人日〉	8 / 32	
	0	
フランス 〈人／人日〉	2 / 8	
	0	
ドイツ 〈人／人日〉	1 / 4	
	0	
中国 (第三国) 〈人／人日〉	2 / 9	
	0	
合計 〈人／人日〉	47 / 125	
	16	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>1. Global History Collaborative の4つの拠点の主要な研究者が集まって、新しい世界史／グローバル・ヒストリーの方法論について集中的に議論を行ない、新しい知見を練り上げ共有する。年1回開催のこのセミナーは、本国際学術ネットワークの研究面での最も重要なイベントと位置付けられている。</p> <p>2. このセミナーは、4拠点の持ち回りで開催し、今年度は、「グローバル・ヒストリー研究における資史料」をテーマとして東京で開く。</p> <p>3. 4拠点によるネットワークの拡大を目指すため、日本国内はもとより、中国をはじめとするネットワーク外の研究者にも参加を呼びかける。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>1. 新しい世界史／グローバル・ヒストリー研究における資史料の使い方について、その方法論を4つの拠点の研究者が中心となって構築し、共有する方向へ進むことができた。また、4つの拠点の主要研究者間での連携と信頼関係をさらに強化することができた。</p> <p>2. 4つの拠点以外の有力な研究者（日本人研究者や中国の研究者）をセミナーに招いて意見・情報の交換を行うことにより、本ネットワークの知見をさらに広い範囲に拡大することができた。</p> <p>3. 他の3拠点の世界レベルの有力研究者たちに、日本における資史料研究の質の高さを知らせることができた。</p> <p>4. セミナーの会場内外での議論により、次年度以後の具体的な共同研究のテーマを定めることができた。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>運営責任者・東京拠点コーディネーター 羽田 正</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>国内旅費</p> <p>外国旅費（招へい者）</p> <p>その他経費（会議費）</p> <p>消費税</p> <p>合計</p>	<p>金額</p> <p>302,240円</p> <p>307,360円</p> <p>470,998円</p> <p>6,774円</p> <p>1,087,372円</p>
	<p>（アメリカ、フランス、ドイツ）側</p>	<p>内容</p> <p>海外旅費</p>	

7-3

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数		派遣研究者	訪問先・内容		派遣先
		氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	内容	
3	日間	羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授	Alessandro STANZIANI・EHESS・教授	研究打合せ	フランス・EHESS
89	日間	上村剛・東京大学大学院法学政治学研究科総合法政専攻・博士課程学生	David Cannadine・プリンストン大学・教授	若手研究者の海外派遣：18世紀後半のブリテン帝国における統治の政治思想について、グローバルな視点からの研究および調査	アメリカ・プリンストン大学
182	日間	程永超・名古屋大学大学院文学研究科日本史学専攻・博士課程学生	He Bian・プリンストン大学・教授	若手研究者の海外派遣：通信使・燕行使重複経験者から構築する東アジアのなかの近世日本に関する研究および調査	アメリカ・プリンストン大学
5	日間	羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授	Alessandro STANZIANI・EHESS・教授	フランス社会科学高等研究院の共同研究プロジェクトの諮問委員会出席	フランス・EHESS

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

・「この交流計画によって初めて切り開かれたと言えるようなグローバル・ヒストリーの可能性について、具体的な研究テーマを通じて学界に提示していく必要性」の指摘を受け、4つの拠点の研究者による実質的な共同研究のテーマを定め、平成29年度から本格的な議論を始めることとなった。

・国内の研究参加の東京圏への偏りの指摘を受け、京都で研究会を一度開催した。新年度に実施予定のサマースクールには、大阪大学の大学院学生を1名派遣予定である。

8. 平成28年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本		アメリカ		フランス		ドイツ		チリ(第三国)		合計	
		人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数
日本	1			7/104 (0/0)		3/13 (0/0)		1/32 (0/0)		0/0 (0/0)		11/149 (0/0)	
	2			2/212 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/212 (0/0)	
	3			0/0 (1/90)		1/5 (0/0)		0/0 (0/0)		2/17 (2/16)		3/22 (3/106)	
	4			1/59 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/59 (0/0)	
	計			10/375 (1/90)		4/18 (0/0)		1/32 (0/0)		2/17 (2/16)		17/442 (3/106)	
アメリカ	1	0/0 (4/470)				0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (4/470)	
	2	0/0 (1/208)				0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (1/208)	
	3	0/0 (0/0)				0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	4	0/0 (8/48)				0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (8/48)	
	計	0/0 (13/726)				0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (13/726)	
フランス	1	0/0 (0/0)	0/0 (6/48)					0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (6/48)	
	2	0/0 (1/91)	0/0 (0/0)					0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (1/91)	
	3	1/5 (2/35)	0/0 (0/0)					0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (2/35)	
	4	0/0 (2/13)	0/0 (0/0)					0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (2/13)	
	計	1/5 (5/139)	0/0 (6/48)					0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (11/187)	
ドイツ	1	0/0 (2/155)	0/0 (7/56)							0/0 (0/0)		0/0 (9/211)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)							0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	1/5 (2/81)	0/0 (0/0)							0/0 (0/0)		1/5 (2/81)	
	4	0/0 (1/6)	0/0 (0/0)							0/0 (0/0)		0/0 (1/6)	
	計	1/5 (5/242)	0/0 (7/56)							0/0 (0/0)		1/5 (12/298)	
インド (日本側 参加研究者)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
イギリス (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	2/10 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/10 (0/0)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	2/10 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/10 (0/0)	
スウェーデン (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	2/10 (1/5)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/10 (1/5)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	2/10 (1/5)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/10 (1/5)	
ノルウェー (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
フィンランド (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
オランダ (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
スペイン (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
	4	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	計	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		1/5 (0/0)	
中国 (第三国)	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	3	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	
	4	2/9 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/9 (0/0)	
	計	2/9 (0/0)	0/0 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/9 (0/0)	
合計	1	0/0 (6/625)	7/104 (13/104)			3/13 (0/0)		1/32 (0/0)		0/0 (0/0)		11/149 (19/729)	
	2	0/0 (2/299)	2/212 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		2/212 (2/299)	
	3	10/50 (5/121)	0/0 (1/90)			1/5 (0/0)		0/0 (0/0)		2/17 (2/16)		13/72 (8/227)	
	4	2/9 (11/67)	1/59 (0/0)			0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		0/0 (0/0)		3/68 (11/67)	
	計	12/59 (24/1112)	10/375 (14/194)			4/18 (0/0)		1/32 (0/0)		2/17 (2/16)		29/501 (40/1922)	

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

**8-2 国内での交流実績**

1		2		3		4		合計	
0/0	( 0/0 )	3/4	( 42/42 )	6/21	( 120/120 )	20/39	( 38/64 )	<b>29/64</b>	( 200/226 )

## 9. 平成28年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	1,124,020	
	外国旅費	10,049,856	
	謝金	14,912	
	備品・消耗品 購入費	91,441	
	その他の経費	2,975,765	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	744,006	
	計	15,000,000	
業務委託手数料		1,500,000	
合 計		16,500,000	

## 10. 平成28年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成28年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
アメリカ	97,000[ドル]	9,700,000円相当
フランス	50,000[ユーロ]	6,000,000円相当
ドイツ	22,000[ユーロ]	2,640,000円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。